

■ はじめに

学校現場では学習指導要領が改正され、小中学校は平成14年(2002)、高等学校は平成15年(2003)から、総合的な学習の時間の新設により、ボランティア活動などの社会体験や、地球温暖化などの地球環境やゴミのリサイクルなどの循環型社会のことや自然観察など環境教育の取り組みがされるようになってきました。

北海道の豊かな自然、とりわけ、知床には原生的な自然が今なお残っています。こうした地域の特徴は、環境教育の題材として適材です。

しかし、実際に知床を題材とした体験型の環境教育を行おうとしても、もともと自然に興味がある人を除き、ほとんどの人は、どんな準備が必要なのか、プランはどうするのか、危険対策など不確定要素が多い、周りの同僚からの理解が得られにくいなどの理由で、結局、敬遠されがちです。

学校の先生は公務員であり、転勤族です。地元の自然について、子どもたちに教えようとしても、自分より子どもたちの方が長くそこに生活しており、今更、子どもたちに何を伝えられるのか、また、屋外で体験型の環境教育の知識もなく、果たして自分にできるのか不安があります。

「知床・うみ、やま、かわ環境教育プログラム」では、こうした点を踏まえ、知床の自然の中で体験型の環境教育を行う際の参考資料として、事前の準備から当日のオリエンテーション（安全確認、ルール）、体験、振り返り、事後評価までの一般的な流れを記載しています。

体験は、これではなければならないというものはありません。「エゾシカの観察」を例にしても、外に出れば植物もあり、自然や野生生物だけでなく、産業や歴史もあります。子どもたちは何に興味を持つのかわかりません。「自然の中で楽しむ」ことが環境教育の重要な出発点のひとつです。

このようなことから、体験は、先生自身が自由に考えてほしいと思い、参考までに具体的な例として示しています。資料編には、環境教育を実施している施設の一覧を掲載しております。

このプログラムを有効に活用していただき、各学校で環境教育が根付く「きっかけ」となり、「貴重な知床の自然を将来へ引き継ごう」という気持ちが芽生えればと思います。